

生きた場面の中で言葉に出会う

東京都港区立赤坂中学校教諭

甲斐利恵子^{か い り え こ}

1 指導の意図

「物事を考えることができる人」を育てたい。そんな思いをもって毎日の授業に臨んでいます。そして、子どもたちの思考力を伸ばすために、私が重視しているのが語彙力です。

語彙力は、思考力に大きく関わります。例えば、「いっぽう」という言葉の後は「比較」することが促されるでしょう。そんなふうには、言葉は「考えを連れてくる」ものだと、私は考えます。

ただ、言葉というのは、その背後にある場面と切り離して理解したところで、なかなか自分のものにはなりません。子どもたちには、ぜひ、実際の生活の中で「使える」言葉を身につけてもらいたいのです。そのためには、日常で使われている生の言葉^{なま}を素材とし、それが使われた場面とセット

2 日常的な実践

にして、意味や使い方を捉えていくことが欠かせません。その意図のもと、私が日常的に授業の中に位置づけているのが、①辞書を引くこと、②新たに出会う言葉を使って小さな文章を書くこと、という二つの実践です。

①「辞書は友達」

日常の生きた場面で使われる言葉を素材にするには、言葉のおもしろさに気づき、言葉に親しむ姿勢をもつ必要があります。そこで、入学後の授業開きから大切に位置づけているのが、辞書を引くことです。「辞書を引く」というと、「意味調べ」「お勉強」という印象をもつことが多いのが、入学当初の子どもたちです。私は、そんな彼らに、勉強のためではなく、生活の中で「あつ」と思ったときに辞書を引くことを習慣づけ

たいと思うのです。

■辞書が身近にある環境づくり

そのために心がけているのが、辞書が身近にある環境づくりです。普段、国語の授業を行う国語教室には、五種類の国語辞典『例解新国語辞典』『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』『ベネッセ新修国語辞典』『学研現代新国語辞典』を数冊ずつと、その他の国語辞典や類語辞典などを一、二冊ずつ置いています。そして、毎時間の授業が始まる前に、ここから好きな国語辞典を選び取り、席に着くことをルールにしています。

■「辞書早引き大会」

授業開きの時間、ノート指導などを終えたら、まず、「辞書は友達である」ということを押さえます。「辞書というのは、あなたたちのお友達で、いつでもそばにいて、支えてくれるもの。だから、『辞書はお友達』を合言葉にね」などと話をしながら、辞書

を身近な存在として意識づけていきます。

その後に行うのが、「辞書早引き大会」です。「早引き」といっても、早く引けるようになることを目指すわけではありません。主眼にあるのは、授業での辞書の使い方を確認することです。ちょっとしたゲーム性とともに、楽しい学習のスタートを切るために、子どもたちには、「辞書早引き大会しよう!」と投げかけることにしています。

手順は、次のとおりです。

- 1 教師が黒板に書いた言葉を、国語辞典で引く。
- 2 言葉を見つけたら、手を挙げる。
- 3 自分が引いた言葉・挙手した順番・語釈をノートのメモ欄にさつと書く。
- 4 三番目ぐらいまでに挙手した人が、順に、自分が使っている国語辞典名と語釈を発表していく。教師はそれを板書する。
- 5 他の人が引いた国語辞典の語釈は、必要に応じて自分のノートにメモする。

辞書を引くことは、できる子とそうでない子の差が生まれにくく、みんなが活躍で

きる時間となるため、教室は大いに盛り上がります。時には、同じ国語辞典を選んだ子の発表が続くこともあります。それでも、四、五番目ぐらいの子が発表するころには、違う国語辞典の語釈が出てきます。すると、子どもたちから「辞書によって、こんなにも説明のしかたが違うなんて!」という声が上がることがあります。これが、教室内にさまざまな辞書があることのよさです。「辞書って、人が作っているもの」「さまざまな語釈がありうる」という雰囲気の中で言葉に出会うからこそ、言葉のおもしろさにも気づくことができるのだと思います。

■言葉に出会ったら辞書を引く

次の時間からは、授業中に一、二回、辞書を引く場面を意識的に設定していきます。生徒に配布する「国語教育通信」(※)や私の話の中で、「これを引かせよう」という言葉を意識して使うようにするのです。

例えば、話の中で「千里の道も一歩から」という表現を使ったら、「この言葉、わかるかなあ……」と、私はしばらく黙っています。すると、彼らは辞書を引いて、「辞書早引き大会」のときと同じように、手を挙げ、順に語釈を発表していく。初めは気づかずにいる子も、言葉に立ち止まること



▲国語教室の本棚には、さまざまな国語辞典や類語辞典などが用意されている。

国語の授業で、 ↑という詩はこれ で深い意味を ことか出来まし ミニスカートとい た。	培う
↑感情だけではなく 事実やエピソード をかく	☆鑑(かがみ) その社会に属する 人に見て行為の規範 とすべきもの。
見えています。 要は、常にアンテ 慣にすることは 必要を無駄にし	本培う (もと、生育を促すた に根元に土をかける 意)養い育てる。

▲生徒のノート。辞書で引いた言葉・挙手した順番(☆の中の数字)・語釈が書かれている。

を毎日続けているうちに、「わからない言葉に出会ったら、まず辞書を引く」という習慣が身についていくのです。

不思議なもので、私が「毎時間に一回以上は、必ず言葉に立ち止まる時間を作る」と強く意識していると、「時系列で書く」「主語と述語の呼応」など、引かせたい言葉が授業の中で自然に口をついて出てきます。大切なのは、その言葉のみを取り立てて提示するのではなく、「話の文脈の中、場面の中で、言葉に出会わせる」ということです。それによって、子どもたちは、背後にある場面や状況も含めて、その言葉を捉えていくことができるのです。

この実践を積み重ねるうちに、子どもたちは、他教科の時間にも「辞書がないと困る」と言うほどに、辞書に親しみをもつようになります。そして、自ら国語辞典を選ぶ視点もまた、育っていきます。辞書にはそれぞれに特徴があること、使用場面に合わせて選んで使うと効果的であることがわかってくるのです。入学当初は、中学生向けに編集された『例解新国語辞典』を使っていた子も、徐々に、『新明解国語辞典』『明鏡国語辞典』など、自分のスタイルに合ったものを手に取るようになっていきます。辞書を習慣的に使うことを通して、言語感

覚も磨かれていくのでしょう。

■子どもとの信頼関係も生まれる

この学習のよさは、言葉を見つけて手を挙げた子どもたちと「目が合う」瞬間をもてる、という点にもあります。何かを注意するときではなく、彼らが「できたー」と思ったときに目を合わせるができる。これは、とてもすてきなことです。うまくできたときに誰かが見てくれるというのは、心強いもの。ですから、彼らの気持ちを開いて、国語を学ぶための信頼関係を築くうえで、この学習の意義は大きいと感じています。

②「言葉の小劇場」

日常の生きた場面で出会った言葉は、実際の文脈の中、場面の中で、自分で使ってみることで、「使える」ものになります。ですから、新しい単元に入る前には、そこで扱う教材文からいくつかの言葉を取り上げ、それを使って百字程度の小さな文章を書く、という学習を行っています。子どもたちには、用紙を配布しておき、自主学習としても取り組ませるようにします。

例えば、「少年の日の思い出」（二年）であれば、「色あせる」「身にしみる」「むさぼる」「あいにく」「繕う」「を盾に」な

ど、子どもたちが普段使うことがなさそうな表現を十〜二十程度取り出しておきます。彼らは、ここから好きな言葉を二つ選んで、それぞれを使った文章を書くのです（左ページ例）。どれを選んでもかまいませんが、私はいつも、「二つのうち一つは、使ったことがない言葉に挑戦しなさい」と声をかけるようにしています。

辞書で調べても、言葉の使い方をつかみきれない子には、「例えばね」と言いつて、その言葉が出てくるような場面、つまり用例を私が伝えるようにしています。言葉が使えるようになるには、語釈だけでなく、用例も言えるようになる必要があります。考えるからです。これによって、子どもたちも、国語辞典に用例が載っている意味を理解するようになっていきます。

普段から、「場面」を意識している子どもたちは、この学習が大好きです。自分で場面を作るのも楽しいものですが、書いた文章を読み合うことで、友達の作った場面を味わい、自分では選ばなかった言葉の使い方を理解することができます。この学習のおかげで、その後の教材文の読みもより深く、確かなものになっていくように感じています。

3 生徒の反応・変化

こうした学習を通して、子どもたちの言葉に対する感度は研ぎ澄まされていきます。生活の中で、生徒が学んだばかりの言葉を使っていたりする場面を見るのは、教師としてうれしいものです。「国語教室の中でできる」ということを超えて、学んだことがそのもつと先に生きる。それが、私が目ざしていることです。

それには、普段の授業の机間指導も大切な機会となります。例えば、「書くこと」

この間、母が、自分が中学生だったときの話をしてくれた。そのときの思い出は、今でも色あせることがないという。受験が近づき、苦しむ母を支えたのは友達だった。私はこの日、母から友達の大切さを学んだ。

今日は、十六年ぶりにディズニールランドに行く予定である。二年ほど前からずっと今日を楽しみにしていた。だが、今日の天気はあいにくの雨。とてもがっかりして、言葉が出なかった。

僕の友達は、毎日毎日夜ふかしをしている。僕は、その友達と遊ぶことになった。その日も彼は眠たそうにしていた。僕は言った。「鳥にたとえるなら、夜ふかしの君は、さしずめふくろうだ。」と。

の時間で、手が止まっている子には、「こんな言葉がありますよ」と伝え、新しい言葉や表現を使うよう促し、全体での交流の場で、それを共有します。子どもたちが「あの言葉、かっこいい」と思うような仕掛けを作るのです。中学生は、「伸びたい」という気持ちが体中にあふれている時期。特に「かっこよさ」には敏感です。友達が使ったすてきな言葉を、自分でも使ってみたくなる。そんなふうに、彼らが「他者から学びたい」と思う場面を作るのも、教師の仕事だと思うのです。

二三年と、学年が上がるにつれて、授業後に子どもたちが書く学習記録が、ぐつと自己評価に富んだものになっていくことには、いつも驚かされます。具体的な物事を表す言葉ばかりでなく、抽象的な概念をめることができるようになっていくからなのかもしれません。まさに、言葉によって思考を得るということです。そのことを意識し、生涯にわたって考えることができる人を育てていけたらと、いつも思っています。（談）

「お前がやったことはわかってるんだ。」刑事はそう言った。だが、窃盗事件の犯人は、「ば、僕は自分の財布だと思ってたんです。」言葉もしどろもどろ、証拠もあるのに、まだ取り繕おうとするなんて、あきれたやつだ。

「キリキリキリ。」私のおなかが痛む。下っている痛みじゃない。今まで感じたことのない痛みが私を襲う。母に相談するが相手にされず、一人で悩みを抱え続ける。この後、救急車で搬送されることなど、私は知るよしもない。

公園に小さいチワワがいた。そこに生意気な子どもが来て、そのチワワをからかっていた。その後、チワワが急変。するどいきばをむき出しにして、その子めがけて追いかけていった。小さいからといって、あなどったからだ。

▲生徒が書いた「言葉の小劇場」の文章例